

屋敷」の小字が残る、上東本村公民館付近で南へ折れる道筋があり、この地点を北東の隅と考えておく。従って、庄城は中央に 100 m 四方の居館を構え、周囲に土塁（土居）、あるいは堀を構えた南北 200 m、東西 170 m ほどの平地城館として復元可能である。ただ、平地城館として、その規模は備中国でも有数のものである。戦国時代後期に備中国に覇を唱えた三村氏の居館跡がほぼ同規模（東西 160 m、南北 250 m）であることから見ても、かなり有力な国衆・土豪層の居館と見るのが妥当であろう。

さて、庄城跡内では、西方院の本堂・客殿造営に先立って、倉敷市埋蔵文化財センターによる確認調査が実施されている。その成果によれば、当地点では鎌倉時代（13 世紀）以降に大規模な造成が行われ、掘立柱建物を伴う屋敷地となったとする。中世末までには瓦葺きの建物があったとされ、これに伴い、青磁や美濃焼など、上流階層の人々の嗜好品が出土している。以上を合わせて、この時期に「城の内」という小字に示される城館(庄城)が存在していたと推定している。その後寛永 13(1636)年に西方院の移転に伴い、庄城があった時期の遺構面は失われたと結論している。なお、中世末の時点ではまだ瓦葺きの建物は珍しく、特に平地城館で用いられた例はほぼない。続く近世初頭（天正末～文禄期）に下れば、岡山城跡を初めとして備中高松城跡（高松陣屋の前身）にも瓦の使用が見られる。庄城跡出土の瓦も、城郭建築に伴うものと見るか、城域に何らかの宗教施設があったと見るかにより、その重要性は変わってくるだろう。

**文献・伝承** 庄城跡について記す文献は存在しない。しかし、先述したとおり平松城跡に隣接している立地状況を鑑みれば、これとの有機的な関係を想定することは可能であろう。平松城は毛利氏に仕えた国衆、平松氏の居城と伝えられている。庄城跡についても同様に、戦国期に台頭した、在地有力国衆の城館と考えておきたい。 (和田)

ひさしやま  
433 日差山城跡 倉敷市山地

地図 27 左

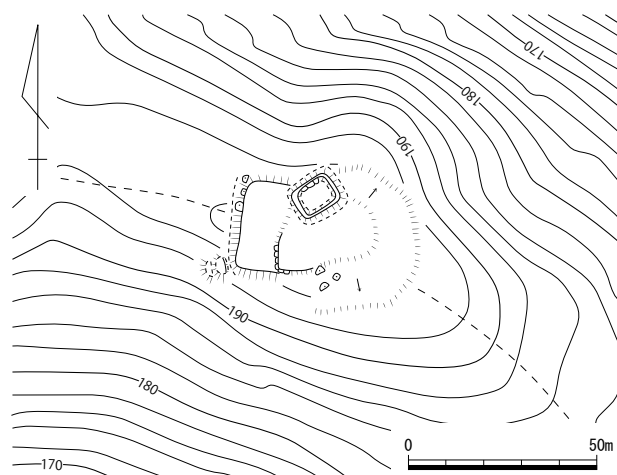
**立地** 足守川西岸、総社平野の出口にそびえる仕手倉山から尾根伝いに北東 700 m にある日差山の頂部標高 200 m に立地。仕手倉山に練尾氏城跡、尾根続き 600 m 北西の北端には鷹巣城跡がある。

**概要** 南北・東西 40 m の範囲に曲輪が 3 面存在する。中央部北側の曲輪は南北 15 m、東西 12 m の規模で、高さ 0.5 m の土塁で囲まれている。その南側曲輪は東西 25 m、南北 12 m ほどで、南西隅には高さ 0.5 m の石積みを確認できる。

さらにその西に南北 24 m、東西 10 m の方形の曲輪があり、その南西端には土塁かと思われる高まりが 2 か所認められる。曲輪群東側の地形改変は顕著ではない。土塁と石積みはこの地点に所在したとされる日差寺行堂跡に伴うものかもしれない。

**文献・伝承** 『陰徳太平記』『中国兵乱記』などの近世軍記物には天正 10(1582)年高松城水攻めの時に小早川隆景の陣が庇山（日差山）に置かれたという記載がある。

(氏平)



第 363 図 日差山城跡縄張り図 (1/2,000)